

## “〈作者〉の「心」と出会う” 中学校和歌教材試案

— 小学校・中学校・高等学校における和歌学習の展開 (3) —

武久 康高

### 一 はじめに

「やまと歌は人の心を種として、万の言の葉と成れりける」と『古今和歌集』「仮名序」にもあるように、歌とは〈作者〉の「心」を言葉によって表すものである。古代より歌人たちは、一首中でその「心」をいかに表現するかに腐心し、様々な表現技法を生み出してきた。例えば鈴木健一は、「日本の古典詩歌を詩歌たらしめているもの」として「〈ことば〉の多義性」を挙げ、歌人たちはその多義性をもとに次のような表現技法を用いてきたという<sup>2</sup>。

① 「自然と人間」のような「共時的な存在」を重ね合わせる技法  
② 「伝統と現在」のような「通時的な存在」を重ね合わせる技法

前者は、掛詞や序詞、見立てなどが大きな役割を果たしている。ここで掛詞についての鈴木発言を引用してみよう<sup>3</sup>。

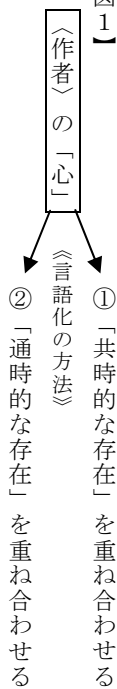
(引用者注—小町の「花の色はうつりにけりないたづらに我が身よにふるながめせしまに」歌の説明のなかで) そもそも人間というものは、比較対照することによって物事を認識し、評価を与えるものである。ここでは、春という季節が醸し出すけだるい情感と花のはかない生命という〈自然〉が、物思いにかかずらっているうちに肝心の美貌が色あせてしまう悲しみという〈人間〉と相互に映発し合いながら、全体として《限りある存在がむなしくも時

を経て移ろい行くことへの哀惜の念》という統一イメージへと向かっていく。

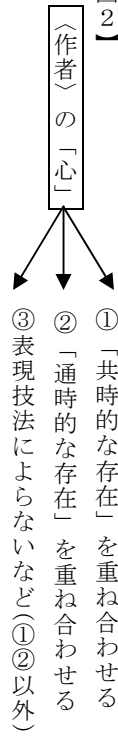
つまり小町の「花の色は」歌は、〈自然〉の光景と〈人間〉の心象風景とが掛詞を持つて重ね合わされることで、より豊かで深い「心」(《限りある存在がむなしくも時を経て移ろい行くことへの哀惜の念》)が詠出されているのである。

一方、後者の典型的な例である本歌取りに関して鈴木は、「共通の和歌表現を回路とすることによって時間軸を行ったり来たりしながら、見ぬ世の人との対話を可能にする道具」と説明している<sup>4</sup>。また、渡部泰明は同じく本歌取りについて、「ある特定の古歌の表現を踏まえたことを読者に明示し、なおかつ新しさが感じ取られるように歌を詠むこと」という<sup>5</sup>。つまり本歌取りとは、「共通の和歌表現」を回路としながら、「通時的な存在」である古歌と〈現在〉とが重なる。その中で「古歌の作者」(見ぬ世の人)と〈作者〉とが「対話」し「新しさ」を生み出す(新たな「心」を発見し言葉を紡ぐ)ものといえる。以上を整理すると次のようになる。

#### 【図1】



むろん和歌には「（ことば）」の多義性」に寄りかからない歌（③感情をそのまま詠んだ歌や叙景歌など）も多数あり、この①②によってすべての和歌が網羅されるわけではない。しかしこうした整理は、初等・中等教育の和歌学習においては有効だと考える。従来の和歌教育で扱われていた掛詞や序詞、見立て、縁語、本歌取りといった表現技法が、【図2】のように「作者」の「心」を言葉で表す方法として整理することができるからである。



稿者は小学校から高等学校まで続く和歌学習のコンセプトを、和歌の言葉を通じて「作者」の「心」と出会うこと」と考えている。そうした目的のもと、初等・中等教育で扱う和歌を、①②③のように「心」を表出するための方法（以下、「歌われ方」とする）ごとに整理し教材を行うことは、児童や生徒の体系的な和歌学習にとって意味あることであろう。

では、現行の和歌学習の中に①②の「歌われ方」を位置づけるとすればどのようなになるだろうか。試みに整理してみると次のようになる。

【小学校】今後の和歌学習に対する「構え」をつくる段階。「和歌とは（作者）の「心」を言葉によって表すものである」ということの理解を最大の目的とする。

【中学校】小学校で学んだ「構え」をもとに教科書所収の和歌の読み取りを行うが、そこに「自然と人間」を重ね合わせることでより豊かな「心」が詠出されている和歌（①）を含める。その「歌われ方」を理解し（作者）の「心」と出会う。

【高等学校】教材中に、和歌伝統と（作者）とが対話し新たな「心」

を発見している和歌（②）を含める。その「歌われ方」を知り、（作者）の「心」に迫る。

以上、発達段階と「歌われ方」の相違に基づく教材案を整理したが、こうした和歌特有の「歌われ方」を理解し、より豊かに（作者）の「心」と出会うこと。これが初等・中等教育において目指すべき和歌学習であると考える。

次節では、これらの実行性を試すために行った中学校での実践を報告する。なお、小学校での実践についてはすでに別稿で紹介している<sup>7)</sup>。

## 二 中学校での実践

本実践は、単元のねらいおよび教材文・和歌については稿者が作成・選択し、単元の構成や各時の指導案などは授業者である村山氏の作成によるものである。

【単元名】和歌の学習（広島大学附属福山中学校2年A・B・C組）

【授業日時】二〇一一年十一月二・七・十六日（C組、全4時間）

【授業者】村山太郎教諭

【単元のねらい】

和歌学習の導入である小学校の授業では、和歌とは（作者）の「心」を言葉によって表すものであることを学習する。中学校においては、和歌特有の「歌われ方」について理解し、そこで（作者）の「心」と出会い、自分なりに応答することを目的とする。だが、和歌に特有の「歌われ方」といっても種類がある。そこで今回は、「古代和歌の表現を形づくっている最も主要なカタチ」とされる〈心物対応構造〉を持つ和歌を取り上げる。

〈心物対応構造〉とは、「事物現象を表す言葉と心情を表す言葉がたがいに対応しあうこと」によって、歌中の〈心〉〈物〉いずれの言葉が

も超えて新たなイメージを構築しうるしくみである」。例えば、「夏の野の繁みに咲ける姫百合の知らぬ恋は苦しきものぞ」(万葉集・巻八・一五〇〇・大伴坂上郎女)の場合、「知らぬ恋は苦しきものぞ」といった心情を表す言葉が、序詞である事物現象を表す言葉(夏の野の繁みに咲ける姫百合)と対応しあうように詠まれている。つまり(作者)は、「人に知られぬ恋の苦しき」というものを「夏の野の繁み」や「姫百合」の喚起するイメージと重ね合わせることで、自らの感じた「心」(人に知られぬ恋の苦しき)をより個別化・イメージ化して言葉にするのである。こうした「歌われ方」を持つ和歌は、心情を表す言葉と事物現象を表す言葉とを対応させることを通して(作者の「心」を読み深めることができるため、中学生にとつても分かりやすく、より豊かな(作者)の「心」との出会いが期待できよう。なお、このような「歌われ方」は序詞を持つ和歌に多く見られる。そのため本単元では、序詞を伴う(心物対応構造)を持つ和歌を中心に教材とした。

#### 【単元展開】

授業では、まず(心物対応構造)を持つ序詞の特徴を捉えた上で、生徒に和歌を作成させている(「行方も知らぬ」という心情を表す言葉を下句に持ち、上句が序詞となっている和歌)。

第2時では、同級生が作った和歌から秀歌を選び、その大意を押さえるとともに批評を行わせている。その際、(心物対応構造)であることから、序詞である事物現象を表す言葉(上句)によって、下句「行方も知らぬ」のイメージ化(「心」の言語化)が如何に巧みになされているかに留意させている。

第3時は、生徒の投票による入賞作品・批評の言葉の紹介。さらに教材文をもとにしながら、「和歌を通じたより豊かな出会い」とはどのようなことか」について考えさせている。

・より豊かに(作者)が自分の「心」を伝える

Ⅱ(作者)の感じた「心」をよりリアルに再現するために序詞を工夫する(景物による「心」の視覚化・イメージ化)。

・読者は、そうした序詞を読むことを通じて、(作者)の「心」(感じた思いの「質」と出会う)。

そして次に、このような(作者)の「心」との出会い・対話を目指し、生徒作成の和歌と同様の(心物対応構造)を持つ万葉・古今・新古今歌(下句に「行方も知らぬ」という言葉をもつ)について、そこでの(作者)の「心」を批評させている(教材一)。

第4時は、前時に引き続き万葉・古今・新古今歌との対話。さらに序詞を持つその他の万葉・古今歌について、同様の批評活動がなされている(教材二)。

#### 〈第1時〉

- ①和歌には「景物で心情を表す」方法があることを伝える。
- ②既習の百人一首歌で、和歌の工夫(景で情を詠んでいること)を見つめる。
- ③景が情の「たとえ」であり、景の部分が「序詞」であることを確認する。「序詞」の特徴を理解するための練習問題。
- ④序詞を使い和歌を作成する。

・可能なら古語「の」(〜ように)を序詞の最後に使用。  
 ・下句の前半は「行方も知らぬ」で統一し、後半には不安・焦り・不透明感のような言葉・感情・状態が入ること。

#### 〈第2時〉

- ①序詞の特徴を確認し、和歌の批評会を行うことを告げる。
  - ②同級生の作った和歌を批評する。
- ・音読後、秀歌を二首選ぶ。  
 ・「批評シート」を配布し、記入(大意と批評(工夫)について記す)。  
 ・4回目「行方も知らぬ」の和歌を一首作成。

#### 〈第3時〉

- ①入賞作品と評価の言葉を紹介(プリント)。評価の共通点を見つける。
- ②教材(教材文、和歌)を配布し、「感じた思いの「質」(Ⅱ(作者)の「心」のありよう)を序詞がよく伝える」とはどういうことか理解する(Ⅱ自ら

の感じた「心」を、景物描写により個別化・イメージ化して言葉にする。

③ 「行方も知らぬ」を導出する序詞を批評する。【教材和歌(一)】

・「どうなるのか分からない不安な感じ」を導出する序詞から、そこで(作者)が感じた思いの「質」を考える。

#### 〔第4時〕

① 「行方も知らぬ」を導出する序詞を批評する。

・「不安な感じ」の質感をオノマトペで表現する

・その質感を効果的に生み出している序詞中の表現を指摘する。

② 序詞を用いた別の4首の和歌を批評する。【教材和歌(二)】

・感じた思いの「質」が最もよいと感じられる和歌について批評する

#### 【教材文】

古くは奈良時代の終わりに作られた『万葉集』から現代に至るまで、和歌はたくさんの人々に親しまれてきました。折に触れて人々は歌を詠み、また読み続けられてきたのです。

しかし、どうして人は歌を詠むのでしょうか。もちろん、人によつて様々な理由が考えられますが、ここではその一例として、歌人である俵万智さんの体験を取り上げた文章を引用したいと思います。

「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日

戦後短歌で空前の大ヒットとなった歌集『サラダ記念日』の、タイトルの由来となった短歌である。この著名な一首に対し、作者俵万智氏自身が、「短歌をよむ」という本の中で、その制作過程の内幕を明かしている。俵氏によれば、歌われている内容に類似する経験は確かにあった、しかし、褒められた料理はカレー味のから揚げであり、その日は「七月六日」でもなかった、と言うのだ。事実在即した初案の「カレー味のから揚げ」「六月七日」では、言葉としての意味や音調がどうしても重い。重いと、あの時自分が感じた思いが正しく伝わらない。だから推敲して今のように変えた、ということのようだ。真実を表すためには、かえって嘘をつかなくてはならない、と言えばよかるうか。作者は、男性にサラダを食べさせる女性を演じることで、自分の体験を正しく取り戻したのである。

好きな人に自分の料理が褒められた瞬間の、何とも変えがたいような思い。俵さんは、そのときの自分の心を歌にしようと思います。自分が体験した、自分にとつての「真実」に、言葉を与えていくためです。しかし、事実在即して歌を詠んでみても、あの時に感じた思いが正しく伝わっていないように思えます。そこで俵さんは、事実をありのまま詠むことを諦め、推敲を重ねた結果、好きな人にサラダを褒められた女性に成り代わって歌を詠んでみます。するとその歌こそ、まさにあの時の自分の心、自分にとつての「真実」を正しく伝えるものと思えたのです。

つまり、俵さんにとつて歌を詠むことは、自分にとつてかけがえのない体験やそこで感じた思いに対して、それにふさわしい言葉を与えていくこと。そのことで俵さんは、あの時の体験や自分の感覚に、歌を通じて再度出会っているのです。そして私たちも、俵さんの歌を読むことを通じて、歌が生みだされた時の俵さんの心と出会っているといえるでしょう。

和歌が今まで親しまれてきた理由。それは、こうした作者の体験やそこで心と読者との、和歌の言葉を通じた出会いがなされてきたからだといえるでしょう。本単元で取り上げた和歌を通じて、より多くの豊かな出会いがみなさんにあることを期待しています。

#### 【一】

由良の門を わたる舟人

かぢを絶え 行方も知らぬ

恋の道かな

みさご居る 沖つ荒磯に 寄する波 行方も知らず 我が恋ふらくは

(新古今集・恋一・一〇七一・曾禰好忠)

秋風に あへず散りぬる もみぢ葉の 行方さだめぬ 我ぞかなしき

(古今集・秋下・二八六・よみ人知らず)

#### 【二】

夏の野の 繁みに咲ける

姫百合の 知られぬ恋は

苦しきものぞ

秋の田の 穂の上に霧らふ

朝霞 いくつへの方に

我恋やまむ

あしひきの 山下響み

行く水の 時ともなくも

恋ひわたるかも

あしひきの 山下響み

行く水の 時ともなくも

恋ひわたるかも

あしひきの 山下響み

行く水の 時ともなくも

恋ひわたるかも

あしひきの 山下響み

行く水の 時ともなくも

恋ひわたるかも

### 三 授業の実際 ―生徒の反応から―

ここでは和歌に対する生徒の批評文を中心に紹介する。

#### 【生徒作の和歌に対する批評文から】

1・2時で生徒は、〈心物対応構造〉を持つ序詞の特徴について、和歌の作成や生徒作の和歌への批評を通して学んでいる。第3時で配布された、生徒作の和歌に対する批評の一部を紹介する。

優勝 21 大海の 引きてまた来る 荒波の 行方も知らぬ 我が成績や

30 手を離れ 風にたゆたう 風船の 行方も知らぬ 恋の道かな

#### 【30番歌への批評の言葉】

①手から離れ空をふわふわと漂う風が、どこに行くか分からないように、恋の道も分からないというがおもしろい。また「たゆたう」という表現もすごいと思った。

②風にふわふわと飛ばされていくという喩え方がすごくかわいいなあと思っただ。少し不安だけど、それでいて相手を思うふわふわした恋心というものがよく表せていると思う。

③風にたゆたうという表現がゆっくりとどこかに行ってしまう感じを上手く表していると思った。また「手を離れ」というところから行方が不安なことという意味していると思った。

④手を離れ、自ら宙を飛ぶ風船はどちらに行くか予想ができず、絶えずゆらゆらと揺れている。その状態のように、恋というものも、唐突に訪れ何が起こるのか分からないのだと思った。

⑤風船が風に乗って、空へ上がっていくのと、恋の道は無関係に思えるが、考えたら似ているなど気づけたのがいいと思った。自分の手から離れ、好きなように飛んでいき、途中で棒に当たったり、割れそうになったり、きれいな空を飛べたりする風船の「波瀾万丈」が恋に似ているのだろう。

ここからは、批評活動を通じて生徒たちが30番歌（生徒作）の「歌われ方」やそこでの〈作者〉の「心」を捉えている様子がわかる。

#### 《「歌われ方」への理解例》

①「手から離れ空をふわふわと漂う風が、どこに行くか分からないように、恋の道も分からないというがおもしろい」

④「手を離れ、自ら宙を飛ぶ風船はどちらに行くか予想ができず、絶えずゆらゆらと揺れている。その状態のように、恋というものも、唐突に訪れ何が起こるのか分からない」

引用した生徒の批評文からは、情景を表す上句（「手を離れ風にたゆたう風船の」）が「行方も知らぬ恋の道かな」という心情を表す下句の喩となつていることへの理解が窺える。

このように〈心物対応構造〉を理解した生徒たちは、和歌を批評するにおよび、「なぜ〈作者〉はこうした心情を表すためにこの表現（喩）を用いたのか」「それがどのような効果をあげているのか」といった、より一層の表現への着目を行っている。例えば「風にたゆたう」という表現に着目した②の生徒は「少し不安だけど、それでいて相手を思うふわふわした恋心というものがよく表せている」とし、③の生徒は「ゆっくりとどこかに行ってしまう感じを上手く表している」とする（ちなみに③の生徒は「手を離れ」という表現が「行方が不安なこと」を意味している」とも想像する）。つまり「行方も知らぬ恋」を「風にたゆたう風船」と表現する〈作者〉の「心」のあり方について、上句の表現を手がかりにしながらかれこれと想像をめぐらしているのである。

〈心物対応構造〉の和歌では、一首中に心情を表す言葉、およびそれに対応する事物現象を表す言葉（ここでは序詞）が詠みこまれていく。そのため生徒たちは、着目すべき言葉やイメージを膨らませる方



向性が分かりやすい。その結果、⑤の生徒のように新たな発見を活性化し（「風船が風に乗って、空へ上がっていくのと、恋の道は無関係に思えるが、考えたら似ていると気づけた」「風船の「波瀾万丈」が恋に似ているのだろう」）、さらには表現に沿ったより深い「心」の読み取りが可能となっているのである。

授業ではその後、教材文を読むことで、このような（作者）の「心」との出会いが「和歌を通じたより豊かな出会い」であると押さえている（＝概念化）。そしてその上で、同様の「歌われ方」を持つ万葉・古今・新古今歌の読解（作者）の「心」との出会い・対話へと進んでいく。

### 【夏の野の「歌」に対する批評文から】

本単元の最後は、生徒が教材和歌（二）から一首を選び批評する活動である。ここでは、最も多くの生徒（55人）が批評の対象として選んだ和歌「夏の野の繁みに咲ける姫百合の知らえぬ恋は苦しきものそ」（万葉集・巻八・一五〇〇・大伴坂上郎女）について取り上げる。

### 「歌われ方」（心物対応構造）への評価

4時間の授業を経て、生徒たちは景と情を重ね合わせる（心物対応構造）について理解をしているようである。また、こうした「歌われ方」の和歌を評価する観点として、次のような意見が見られた。

・四つの歌の中でこれを選んだのは、一番作者の心理やたたさされている状況が想像し易かったからです。イメージを作り上げることが出来るということは、例えである上の句に説得力があるという事です。この歌を読んだ時、「成る程、姫百合と恋は全く関係のない物だけど、歌の中でのそれぞれの境遇は似ているな」と思いました。（B1）

景の部分（上句）から、（作者）の立たされている状況やそこでの心理

がしっかりとイメージできること。そこに景の描写の説得力を見出し、和歌評価の観点としている。

### 表現への着目

前述したように（心物対応構造）の和歌では、（作者）の「心」を読み取る上で着目すべき言葉やイメージを膨らませる方向性が分かりやすい。本和歌でも生徒たちは、「姫百合」や「夏の野の繁み」といった言葉に着目し、そこから豊かにイメージを膨らませている。

・私がこの歌を選んだ理由は儂さがとても伝わってきたからだ。

「夏」「百合」といった爽やかな言葉が使われている分、悲しみが増していると感じた。「夏の野の繁み」は、大体豊かに繁っている。その中に一本だけ咲いている姫百合は目立たない（作者のこと）。作者が恋している想い人を好きな人は作者以外にもたくさんいるので、作者の想いは本人に届かない。それがとても悲しいという意味ではないだろうか。（B2）

「夏」や「百合」を用いることによる効果や「夏の野の繁み」に咲く「姫百合」のイメージ化、それらが（作者）の状況や「心」に重ね合わされている例である。このようにほとんどの生徒たちは表現に即して豊かにイメージ化を行っているのだが、なかでも目立つのは、景の部分で（作者）があえてこの表現を選んでいることへの言及である。いくつか例をあげてみよう。

・「姫百合」という表現が、繁みにひっそり咲いている様子を強くイメージさせてくれる。もしこれが、赤いバラや、強い香りのキンモクセイなどであれば、イメージは全く違う、というか、イメージにあわないだろう。おしとやかで、気弱そうな感じが、「姫百合」からする。「夏」ということは、まわりはよく繁っていることだろう。緑も深くなり、百合の存在などだれも気づかないこ



この和歌を詠んだ人ははげしい恋心もちつつ、しかし相手は自分の心の中の繁みかき分け、自分の中の姫百合の花を探しには来てくれなかったのだろう。つまり恋心を悟ってもらえなかったのだ。それで「知らぬ恋は苦しきものぞ」といつているのだと思う。この表現のしかたはともうまいと思った。(C3)

・「姫百合」はとても可愛らしいひびきで、女の人のことを指しているのかなと思いました。繁みに咲けるといことは、あまり目立たないということかなと考えたので、町(村)の娘が詠んだのでしょうか？(C4)

C3の生徒は、鮮やかな「姫百合」が繁みに隠れるというところから、激しい恋心を抱き、それを相手にも求めるような(作者)像を想定し、C4の生徒は「姫百合」の可愛らしいイメージから、(作者)を目立たない町娘だと思いつく。それぞれの読みを通して、生徒のなかに自分なりの(作者)が立ち上がっているのである。

こうして生徒の立ち上げた(作者)は、現代の生徒たちと同じような悩みを抱えていたり(A1)、それゆえ応援したくなるような等身大の存在であったり(B5)、あるいは恋の苦しさを生徒に気づかせてくれる人物でもある(B6)。

・繁みの中にかくれてしまい、目立たない姫百合の恋。知つても  
らえないことの苦しさは、誰もが味わったことがあると思う。歌  
い手も気づかれないような恋をしている立場だったのだと思う。  
季節こそ夏であるけれど、切ない歌だと思った。(A1)

・きつとこの人は、相手への思いを大切にせずして、逆に伝わら  
なくて苦しいと思っているんだと思う。私はこの人にぜひ頑張つ  
て欲しいと思う。(B5)

・私は4つの中でこの和歌が一番想像しやすくいいと思います

た。夏の野の繁みの中に一本だけ、誰にも気づかれずに咲いて  
いる姫百合が思い浮かべられます。この姫百合のように、知られな  
い恋なら、きつととても苦しいものなのだろうな、と思いました。  
それと、すぐきれいな例えだなぁと思いました。一本だけ、誰  
にも気づかれずに咲いている姫百合は、可憐であって、それでい  
て悲しそうで、でも立派に咲いている。これは書き手の恋そのもの  
のだと思います。そして、恋って苦しいものなのだ、と気づか  
せてくれる歌でもあります。この和歌はともわかりやすい表現  
でいいと思いました。(B6)

B6の生徒のように、本和歌を選んだ生徒たちの理由の多くは「わか  
りやすい」である。これは内容が生徒にとって身近であることや景の  
部分のイメージ化のしやすさが関係しよう。そのため、自分たちと同  
じような悩みをもつ(作者)を思い描き、それに共感する生徒たちも  
多い。「和歌に親しむ」という中学校和歌学習の目的からいえば、こ  
うした学習によつて生徒が和歌の(作者)に親しみを持つことは悪いこ  
とではなからう。

しかしこの分かりやすさは一方で、生徒の思考を止めたり、(作者)  
との対話を疎外してしまう恐れもある。

・小さな姫百合が繁みにかくれて咲いていて見つけにくいように、  
気づいてもらえない恋を苦しく思っているのだと思います。「姫  
百合」で女性？の可憐な小さな想い。姫百合がなかなか見つけら  
れない様に、自分の気持ちに気づいてもらえないことを心苦しく  
思っているんだと思いました。「あー分かる分かる」なんては言  
いませんが、「よくあることだよー」と思いました。(A2)

本和歌についてA2の生徒は、自分は共感しないが「よくありそうな  
恋のシチュエーション」として意味づける。そのことで(作者)の「心」



の固有性は、ありふれた恋心として処理されてしまうのである。これを防ぐためには、例えばC1・C3・C4の生徒らのように、「なぜ〈作者〉はこの表現を用いたのか」「それがどのような効果をあげているのか」といった、表現を通じた〈作者〉の固有性への言及が欠かせないであろう。

また一方で、こうした表現への着目は次のような学習ともつながりうる。

・姫百合がかわいらしいイメージがあるので、気が付かれないところがより切ない。それが相手に気が付いてもらえない恋になぞらえてあるところが上手いし、分かりやすい。気が付いてもらえない恋が苦しいという主題も、共感されやすいのではないだろうか。(A3)

A3の生徒は、「姫百合」のイメージを巧みに利用して「気が付いてもらえない恋の苦しさ」と重ねた点、およびその主題が「共感されやすいのではないだろうか」と評価している。つまり、人の共感をさそう「語り」のあり方についてA3の生徒は言及しているのである。本和歌は生徒にとって分かりやすく、共感を誘うようなものだと見える。では、何がどのように語られているから人々の共感を誘うのか。本和歌のように分かりやすい歌の場合、そうした〈作者〉の「語り」のあり方に注目して批評することも可能であろう。

#### 四 おわりに

まずは中学校での実践についてまとめると、全4時間の学習を通じて生徒たちは、〈心物対応構造〉(①「自然と人間」のような「共時的な存在」が重ね合わされる「歌われ方」)について理解したようである。また、分析中で述べたように、生徒たちにとって〈心物対応構造〉の

和歌は、着目すべき言葉やイメージを膨らませる方向性が分かりやすい。そのため、一首中の表現に沿ったより豊かな〈作者〉の「心」との出会いが果たせていた。さらにそこから、〈作者〉の表現の仕方(「語り」のあり方)の学習への展開も期待できた。表現にこだわった和歌の学習を目指すうえで、〈心物対応構造〉といった「歌われ方」をした和歌の教材化は有効だと考える。

次に今後の課題を述べる。今回の授業で用いたのは、主として序詞が用いられている〈心物対応構造〉(①「共時的な存在」が重ね合わされる「歌われ方」)の和歌である。今後は、掛詞や見立てといった技法が見られる和歌についても教材化を行い、中学生にとってこの「歌われ方」の学習はどのような意義があるのか、さらに検討したい。

#### 注

1 〈作者〉とは、現実の作者とは異なり、歌を作る「今ここ」で立ちあらわれる主体のことを指す。こうした〈作者〉観は、渡部泰明の以下の著作を参考にした(渡部泰明『和歌とは何か』岩波新書、二〇〇九・七)。

2 鈴木健一『古典詩歌入門』(岩波書店、二〇〇七・四、一〇二頁)。

3 注2鈴木書、一九頁。

4 注2鈴木書、五九頁。

5 渡部泰明『和歌とは何か』(岩波新書、二〇〇九・七、一〇二頁)。

6 拙稿「小学校・中学校・高等学校における和歌学習の展開」(『高知大学教育実践研究』第二五号、二〇一一・三)、同「小学校・中学校・高等学校における和歌学習の展開(2)——小学校実践編——」(『高知大学教育実践研究』第二六号、二〇一一・三)。

7 注6武久(二〇一一)。以下、授業の概要を示しておく。

【単元名】歌が生まれるとき(高知市立朝倉小学校6年2組)

【授業日時】二〇一一一年九月五・六日(全2時間)

【授業者】武久康高

【単元のねらい】

和歌学習の導入である小学校の授業では、和歌とは〈作者〉の「心」を言葉によって表すものであることを理解させる。より具体的には、〈作者〉がその

「心」を言語化するプロセスについて、自分も歌を詠んでみることによって児童に追体験させる。またそこで〈作者〉の「心」と出会い、自分なりに応答すること。それを「和歌に親しむ」第一歩とする。

【單元展開】

授業ではまず、「どうして人々は歌を詠むのか」という問いに対する教材文（授業者作成）の意見（「あつ」と感じた心の揺れが種となって歌が生まれる）を捉えさせ、〈作者〉がその「心」を言語化する局面に関心を向けさせた。その後、児童自身が「あつ、秋だ」と感じる状況を探させ、さらに教材文にある「秋来ぬと目にはさやかに見えねども」にぞおどろかれぬる」（古今集・秋上・一六九・藤原敏行）の□に入る言葉を考えさせることで、「あつ」と感じた〈作者〉の「心」との出会いを図った。

2時間目は、自分が発見した「あつ、秋だ」を、和歌の形式に従って表現させた。これは、歌が生まれてくる現場の追体験であり、さらには〈作者〉の「心」に対する自分なりの応答（自分だったらこんなふうに感じる）でもある。

<sup>8</sup> 鈴木日出男『古代和歌史論』（東京大学出版会、一九九〇・一〇、一三八頁）。

<sup>9</sup> 注8 鈴木書、一三八頁。

<sup>10</sup> 中学校段階では、情の部分を参考にしつつ生徒にイメージ化させる活動でかまわないと考える。これをもう少し深めるためには、（本和歌のような万葉歌では難しいが）「和歌世界において「姫百合」はどのようなイメージを担ってきたのか」、「それが本和歌ではどのように使用されているのか」といった、和歌伝統と〈作者〉との対話「通時的な存在」の重なりという観点からの学習も可能である。

（高知大学）